

街路樹や公園などに多く植えられているおなじみの木です。ほうき立ちする樹形が美しく、強靱で紅葉もきれいなことから各地に植えられています。落葉高木で、ふつつう高さ20~25mになりますが、大きなものでは高さ50m、直径5mにも達する巨木も見られます。分布も広く、北海道を除く日本の他、朝鮮、中国、台湾などにも分布しています。寿命の長い木で、天然記念物に指定された銘木が各地にあります。

葉は2~7cmで、さわってみるとザラザラしています。ムクノキやエノキなども、さわってみると同じようにザラザラしています。葉がざらつくのは、ニレ科のなかまの特徴ですので覚えておくとよいでしょう。

材はかたく、木目も美しくくりにくいことから、昔から用材として利用されてきました。特に社寺建築などには欠かせない材料で、出雲大社本殿の大戸びらはケヤキの1枚板で作られています。この他、盆や臼、ついたて、楽器、漆器、盆栽などいろいろなものに利用されています。

名前の由来は、木目が美しいことからケヤケキキ（異木、「ケヤケケキ」には、尊いとか秀でたなどの意味もある）と呼ばれたなど、諸説があります。



▲ ケヤキの葉



▲ ケヤキの葉：表面がざらざらしている



▲ ケヤキの樹形：ほうきのような樹形になる



▲ ケヤキの樹皮：ブロックではげ落ちることが多い